

に、思い出せることがあります。

それは、母の手、です。

しかし、その手は、あの美しい顔には、似てもつかぬものでした。

わたしはいつか、その手をどうにかして、あの色白の美しい顔に合わせようと、一晩じゅう、一睡もせずに苦心したことがあります。そうすればするほど、あの筋っぼい、ごつごつした骨だらけの大きな手が、頭じゅうをおおうのです。

そして、みにくい冷酷な手が、いまにも音をたてて、わたしの尻を打ちまくろうとするのです。

なぜ、そんなに手だけが異様だったのか、理由がないわけではありません。

母は当時、なおりにくいとされていた肋膜炎をわずらい、長い間床に伏していたのです。

でも、その母が、勉強をなまけたからといって、またバレエのレッスンを真剣にやっていた。こなかったからといって、やにわに、わたしのお尻をむきだしにして打つときは、健康な人でも、これほど強くは力を入れられないだろうと思うくらい乱暴でした。

長い病床でやせおとろえ、骨ばかりになった手と、そのときのけんまくのものすごさ

き、愛の鞭、から、やっど解放されました。

それからしばらく、わたしは、母のいまわしい、わたしにたった一つ残されたあの手を忘れることができました。

コンクリートの手

やがて、わたしは高等学校を終えると、某建築会社につとめはじめました。

そこで、いまのかれをみつけたのです。

かれは、この会社につとめて、十年になるのですが、女と遊ぶよりも、大きなビルディングの骨組みを考えるほうが、ずっと楽しいと同僚にもらしていたそうです。しなやかな女性を相手にするより、打ったり、たたいたりしてたくましいビルディングを作ることが、かれの性には合っていたようです。

そのかれが、どうして、わたしと結びつくようになったか、お話ししましょう。

あるとき、かれは、わたしを突然、昼食にさそいました。

そのころわたしは、会社でも、美人の列に加えられていました。

顔はどちらかと言えば、美人というより、小悪魔のなかわいという感じを与えていたそうで、それにもまして、ピタリと洋服を

が、わたしの記憶に、みにくい手、冷酷な手、をやきつけることになってしまったのでしょうか。

それに、母は、わたしが泣くことを許しませんでした。

「あなたが悪いのです。いけないのはあなたです。悪いことをして罰を受けるのはあたりまえです。泣きやむまで、打ちますよ！」

母はほんとうに、そのとおりしました。

いやおうなくわたしは黙らされ、ひりひりするお尻のことも訴えることができず、耐えなければならなかったのです。

「愛の鞭」という

母が死ぬと、わたしは、バレエのレッスンだけは、どうしてもやめたいと思いました。

それは、そのころ、覚えが悪いとか、全然格好がついていないとか、といって、打ったり、たたいたりしてうまく教え込むことは、愛情の鞭、だといって、だれも非難することとはなく、先生はそれを日常茶飯事のことのように平気で行なうのです。

それに、わたしは、バレエがあまり得意ではありませんでしたので、理解することができても、素質があって習っている人のように

身につけたわたしのスタイルが、同僚の注意を引いていたようです。

かれが、わたしをさそった理由は、なにかの気まぐれだったとしか思えません。わたしは、早くから、かれの存在を意識し、活発で行動力のあるかれに、ひそかに目をみはっていたのですから、内心の喜びは、からだじゅうをわきたせました。

約束のレストランへいそと早めにでかけると、座席を獲得して、ドアの前に立つ人を見張っていました。

やがて、かれは、背の高い、日やけた、骨組みのがっちりしたビルディングのようなからだを、ドアに押しつけました。

「いやあ、待たしちゃって！」

かれは、わたしのそばへくるなり、外国人のように、なれたしぐさで、握手の手をさしだしました。

その、イタについたようなふんい気につられ、わたしも、にっこり笑いかけながら、手をさしだしました。

(あっ！)

わたしは、いまにも声を発しそうになり、あわてて、手をはなそうとしました。

なにか、背筋に、じーんとくるものを感じ

は、一、二度習っただけでは手足が格好よく意志どおりに動かないのです。

先生は、わたしの、一心にやっているにもかかわらず不格好な手足を認めると、やにわにとんできて、お尻をたたいたのです。

そして何度でも、きれいに手足が動くまで、愛情の鞭、をきらず、そばにつきっきりでいるのです。

その先生の手は、すんなりと、すべすべしていましたが、お尻をまくって打つときは、まるで、母に打たれているような錯覚にとらわれました。

わたしは、とうとう、その先生がどこかの劇団にはいるまで、やめることを言いだせずに通いつづけました。

すでに、わたしはそのとき十五歳になっていました。それからは、バレエはやめました。父も、バレエを習うにあたっては、賛成ではありませんでした。ただ、母が夢中で通わせ、母亡きあとも、わたしが楽しく通っていると聞いて、せめて、好きなことでもさせてあげようという気持ちだったので、急にわたしをやめたとと言っても、うなずいただけでした。

そんなわけで、わたしは、あの、のろうべ

たのです。

だが、わたしは、引っこめませんでした。その、からだじゅうをはてらすような感覚は、なにが原因なのか、もう一度ためしてみたくなり、こんどは、かれがにぎったよりきつくぎゅっとなぎりにしました。

わたしは、ますます動気を早める胸に、そつと自分の手をおおいました。

あとになって思い出そうとしても、そのとき、わたしは、なにを食べたのかおぼえていません。からだじゅうにたぎる、熱いものを感じていただけです。

それは、まぎれもなく、あの手、でした。ふたたび、まざまざと思い出させる、冷酷な筋っぼい母の手の感触でした。

その日からというものの、また、あの手が、いまにも、わたしの尻をあらあらしくたたきだしそうなけいを感じたのです。

すると、わたしは、忘れていたあの感触を、わたしの尻に、じかに感じたいと熱望しはじめたのです。

それは、あのころ感じた恐怖の念ではなく、歳月は、それをなつかしい思い出のように変えてきていたのです。

それを思うとき、わたしは、はっと、身の